



Title	廣瀬淡窓の教育意見：とくに教育の目的について
Author(s)	井上, 源吾
Citation	人文・社会科学研究报告, 3, pp.1-10; 1953
Issue Date	1953-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/33837">http://hdl.handle.net/10069/33837</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-11-25T03:10:20Z

## 廣瀬淡窓の教育意見

——とくに教育の目的について——

井 上 源 吾

廣瀬淡窓は其の著、「約言」の中で「敬天者必學、學即敬天也」と述べてゐる。敬天の信仰に立脚する淡窓は、敬天者は必ず學ぶべきであり、學問する事は即ち敬天の道であると確く信じてゐた。では何故に敬天者は學ばねばならぬかと言ふ事が先づ問題となるであらう。この事に關聯して、吾々人間に於ては何故に教育が必要であるか、又其の目標はいづこに置くべきものであるかと言ふやうな事が問題となるのである。これらの事に就いて淡窓は如何様な考を抱いてゐたであらうか。以下吾々は是等の問題に關する淡窓の意見を説述して、其の思想のうちに含まれてゐる二三の事項を摘出して其の特徴を明らかにしたいと思ふ。然し以上の諸件を明らかにするに先だつて、淡窓に於ける「教」の意味を究明して置く必要がある。

淡窓は「教」といふ事を如何なる意味に解してゐたであらうか。淡窓によれば、この宇宙のあらゆる事物には理が備つて居り、この理を具有してゐる事物に対処する事が義である。淡窓は之について、

「物ニ在ルヲ理トナシ、物ニ処スルヲ義トナス、理ハ天ヨリ出デ、義ハ我ニヨリ立ツ」

と言ふ。義は古より「宜也」「事の宜しきなり」とも註せられる様に、その事物をして最も宜しき状態たらしめるものと解せられるが、淡窓によれば、物にある理を其の本質を失はない様に対処する事が義である。然るに淡窓は、「理義並言、義即道也」とも言ふ。この註によれば、「裁制するといふ立場からして義といひ、履行するといふ立場からして

道といひ、誘導といふ立場からして、教といふ。三者一也」とある事からして、義も道も教も理より出たものである。然して、其の名を異にするのは、各其の一面を強調した場合に与へられたものに過ぎない。即ち天より出でた理に従ふ事が義であり、この理を実踐する事が即ち道であり、理へ指導する事が即ち教である。義も道も教も其の本質に於て何等異つたものではない。唯その立場を異にした場合の名である。かやうに一応ここで教の意味が明らかにされるのであるが、淡窓に於ける「教」はこれだけでは未だ不十分である。さてこの義を義たらしめるには、「義由我立」と言はれる様に「我」といふ媒體を必要とする。「我」の取捨によつてはじめて「義」も義としての価値をもつに至るのである。これは道と教との場合に於ても亦全く同じである。即ち天より出でた理は、人といふ媒體によつて、義・道・教の価値契機として顕現し得るのである。ところが淡窓によれば、道は敬天によつて始めて完全なものとなる。何故かと言へば、淡窓は人々が敬天の信仰に立たなければ、道も道としての機能を完全に發揮し得ないとするのである。この事からして、義と教との二つに於ても亦其の帰着点は敬天であると言ふ事ができる。かくて教とは、我が人を敬天へ導く事であると言ふべきである。さきに吾々は淡窓の思想を検討して、其の基盤が敬天の信仰にある事を明らかにしたが、こゝで見られる如く「教」に於ても其の立場は不變であつて、教育者が被教育者を敬天へ誘導して行く過程に於ける作用を教と為してゐたのである。これが敬天の理念に立つ淡窓に於ける「教」の意義である。

二

人間には何故に学問が必要であらうか。この問題に対しては、淡窓は先づ人間がこの宇宙に於て占めてゐる位置を明らかにしなくてはならぬと考へる。淡窓によれば、この宇宙に於ける天地と吾々人間とは父母と子の如き關係にある。父母の尊き事は子たるものが子としての務を完全に果した時に最もよく發揮されるものである。然して、万物の中に於ては、人間は靈長であり、鳥獸草木等あらゆる生物はこの人間に奉仕する為に作られたものである。又人間に於ては大まかに肉體と精神との二つに區分せられるのであるが、「心」は人身の粹であり、「四肢百體」は之に奉仕する用を為すのである。この關係は万物の中に於ける人間と鳥獸草木とのそれと酷似してゐる。故に吾々の心の中にこの宇宙の方法を見出す事も可能であると言へる。即ちこれについて淡窓は、

「人ノ神識ハ眇トシテ微ナリト雖モ然レドモ天地ノ精英萃ル、磨イテ之ヲ明ラカニスレバ、神聖ニ至ルベク、捨テ、修メザレバ鳥獸ト帰ヲ同ジウス也、」

と言ふ。かやうに吾々の精神は「天地ノ精英」であり、これを磨いて明らかにすれば、神聖の域にも進み得るものであるが、この練磨を怠つた場合には、動物と何等差等なき醜惡なる生活があるのみである。故に吾々人間に於ては、この動物的醜惡な生活を克服して、神聖に至るための修鍊と工夫とが要請される。この修鍊と工夫の一として学問が教へられる。故に学問とは單に知識の攝取に止まるものではなくして、知識を通して精神を修鍊するにある。然しこの学問の修業に於ても唯だ慢然と立向ふのみならば、所謂多岐望羊の歎を免れないであらう。然らば学問に當つて最も心すべき事は何か。

淡窓によれば、心と学の対象との關係は恰かも吾々の目と五色のそれと極めてよく類似してゐる。吾々の目は能く物の黑白を識別する能力を有する。然し吾々があやめも分かぬ暗夜に經驗する様に「天光」が物を

照明しなかつたならば、吾々の目は全然視る事が出来ないのである。心と学の対象との關係も全く之と同一である。これについて淡窓は次の如く言ふ。

「心能ク是非ヲ弁ズ、然レドモ天威ヲ以テ之ニ臨ムニ非ザレバ則チ意識ナラズ也、」

即ち吾々の精神は是を是とし、非を非とし得る能力を有してゐるが、然し物を照す天光にも喩へられる天威の力によらなければ、物を認識する所の基盤である精神は歪曲を免れない。つまり「磨而明之」する学問とはたり得ないのである。では「天威ヲ以テ之ニ臨ム」とは如何なる事であらうか。人間は其の精神生活に於て、敬畏するものを有しない時は必ずや邪僻に陥り邪念が生ずる。邪念のために是を捨て非を取ることになる。邪念を含んだ精神は正しい認識と把握を為し得ないのである。かゝるが故に淡窓は、

「必ズヤ天威ノ畏ルベキヲ知りテ後、是ヲ是トシ非ヲ非トスルノ意識ナリ、是ヲ是トシ非ヲ非トスルノ意識ニシテ後、義理アゲテ用フベカラズ也、」

と言ふのである。この邪念の發生を抑制する天威の力を信じてこそそこに始めて正しき判断の力が生れるのである。先づこの信仰を把握して、然る後に学問に向つたならば、天を基盤とする精神は、其の認識は正しく、其の把握は確實であり、多々益々弁ずる事にもなるであらう。であるからして、

「義理ヲ論ジテ之ヲ心性ニ本ツケズ、之ヲ心性ニ本ツケテ、之ヲ天ニ本ツケズ、之ヲ天ニ本ツケテ、敬天ヲ以テ徳ニ入ルノ要ト為サザレバ、皆未ダ善ヲ尽サズ也、」

と言へるのである。学問とは精神を磨くことであり、精神の練磨に於てはそれを規正する天なる契機が必要缺くべからざるものである。かゝるが故に敬天の理念の把握が学問に於ては極めて重要な關鍵であり、こ

の精神的態度を確立する事が強く要請される事となる。こゝに敬天の理念が淡窓の學問に於て大きな地歩を占めるのである。淡窓にあつては、「敬天」と「教學」の先後を論ずれば、學ぶことそれ以前に於て先づ敬天者でなければならぬ。故に道の實踐に於ては敬天の信仰のみによつても不可能ではないといふ理論が一応は成立する。事実淡窓も「敬天可以尽道耶、曰可也」と言つてゐるのである。然らば何故に學問が必要であるか。これについては既にこの文の冒頭に記した如く、淡窓は、「敬天者必學、學即敬天也」と言ふ。淡窓によれば、天は吾々人間をこの世に創造したのであるが、又人間に夫々の職業を命じた。この社会生活に於ける総べての職は天の命じたものである。所謂天職である。この天職を全うするには、最善の力と方法を講究すべきであるが、淡窓は其の方法を次の如く語つてゐる。

「我ノ我が職ニ於テ善ナラザル所アレバ、將ニ之ヲ心ニ求メントス、將ニ之ヲ人ニ求メントス、將ニ之ヲ古書ニ求メントス、三者皆我が師ナリ、イヅレヲ先トナシ、イヅレヲ後トナサン、要ハ其ノ求ムル所ヲ得ンコトヲ期センノミ<sup>12)</sup>、」

即ち天に事へる為には、心に求め、人に求め、古書に求めるのである。自己を反省し省察を加へる事、先覺について教示を仰ぐ事、書によつて研究する事、要するに求めんとするものを探り当てる事が必要である。この為に吾々は智力の及ぶ限りの努力を重ね、あらゆる方法を講ずべきである。誦書はこの方法の一つであるからして、敬天者にとつては、書は不用であると為す事も、書を読む事のみを學問とする事も共に未だ完全とは言はれない。かやうに、淡窓にあつては天に事へる手段としての學問であり研究である。學問の契機は敬天の理念にあるのである。

これまで説いて來た事に依つて、淡窓は吾々人間には何故學問が必要であるか、この事に關して如何様に考へてゐたか、略々明白になつたと

#### 広瀬淡窓の教育意見

「思ふ。然し乍ら如何なる事が「善ナラザル所」であり、淡窓の「求ムル所」はいづこに在るであらうか。教育の目的、教育の理想は如何なる所に置くのであらうか。是等の事については淡窓は未だ具体的には語らないのである。かくて吾々は淡窓の教育の目標がいづこにあつたかを究明しなければならぬ。然し之に先だつて、教育の内容となるべき所謂文化財の問題がある。これに就いて淡窓は如何なる意見を抱いてゐたであらうか。

### 三

淡窓によれば、社會の文化は主として文字によつて繼承されるものである。とくに社會規範がそうである。

「道ト云フモノハ声色臭味アルニ非ス、故ニ文字ヲ借リテ伝フルコト和漢共ニ同ジ、別シテ我國ハ異國ト制度万端異ナルコトナレハ其憑ム所ハ書籍文字ノミナリ<sup>13)</sup>、」

この文字を媒介として繼承された社會規範所謂道は、それが記録されると同時に固定し發展性を失ふものである。然るに人間及びその社會は日々に向ふ發展して止まない。一代は一代よりもより高く、より深く伸びて行く。まして数千年の歲月は、この差を愈々大にするに至る。かくてこの定着した社會規範は生きた人間を教へ、其の社會を指導する力を失ふに至る。つまり死文となるのである。とりわけ我國といふ特殊な立場に立つて考察するならば、そこには時間的にも空間的にも著しい異相を見出すであらう。即ち国土、人種、言語、氣候、風土、遺傳、境遇其他無数の特殊の事情に制約せられ、そこに見られる社會規範は、固定したそれとは全く異なるものが見られるであらう。故に、

「今、礼記ノ雜記ナト、喪服ノ制ヲ述ヘタル所ヲ執リテ、之ヲ研窮スルニ誠ニ煩碎ノ至リ<sup>14)</sup>、」

といふ状態を露呈せざるを得ないのである。かゝるが故に學問する人は、

「我輩問スルハ、古人ニ奉公ノ為ニ非ス、唯己カ身ノ為ニスルナリ、故ニ聖人ノ言ト雖モ、己カ身ニ於テ切ナラサルコトハ之ヲ除キ諸子百家ノ言タリトモ己ニ益アルコトハ之ヲ取ル<sup>19)</sup>、」

といふ態度こそ第一に心掛けねばならぬ事である。そして之は又教育に従ふ人の態度でもなければならぬ。吾々が学び、教へるのは古人に奉行の爲ではなく、唯自己の心身の向上発展を希つての事に外ならないからである。然るに世の所謂学者は、かゝる重要な立場を忘れて、全く古人に奉公の学を為してゐる。

「夫レ世儒ノ人ヲ教フル固ヨリ心ヲ用ヒサルニ非ス、一經ヲ講スルニモ必ス其註ヲ審ニシ、又其疏ヲ審ニシ、又他ノ註解ヲ聚メ、異同ヲ論定シテ是ヲ取ルニハ取ルノ説アリ、是ヲ捨ツルニハ捨ツルノ意ヲ釈シ、一字ト雖モ等閑ニ過スコトナシ、詩文ヲ筆削スルニモ、少ノ瑕ト雖モ是ヲ恕スルコトナシ、若シ己レ一覽ノ後、他人ヨリ是ヲ難スルトアレハ師ノ不面目トス、是レ誤ヲ伝ヘサルノ志ニシテ、其意篤カラサルニハ非ス<sup>16)</sup>、」

其の説の根拠を註に依り、疏に求めて一字一句も忽せにしない事は、学問研究に於ける真摯な学徒の態度として、又道を後代へ伝える教育者の態度としても、正にかくあるべきものであらう。事実あらゆる学問には、学問それ自らの領域がある事も明白である。然し乍ら淡窓によれば、かゝる態度こそ其の憑む所の書籍文字に溺れたもの、固定した道になづんだものに外ならない。固定した道になづみ、社會的歴史的の考慮と用意を缺いだ人は教育者といふ職にあつては、其の適格性を缺如したものと云つてよい。

「夫文字ニ滞リテ、道理ヲ忘ル、ハ、其人天分下劣ナル故ナリ、如此ノ人文字ヲ棄テ、道ヲ求メタリトテ精妙ノ地ニ至ルヘシヤ、愈々愚陋ノ境ニ墮ツルナリ<sup>17)</sup>、」

では淡窓にあつては、其の教育に於てそもそも如何なる事が要請され

てゐるか。淡窓は「凡古書ヲ講ズルハ、今世ニ用ヒンガ為ナリ<sup>18)</sup>、」とも又、「欲<sup>レ</sup>供<sup>レ</sup>今日之用<sup>19)</sup>」とも言ふ。故に孔子の育英の事實を指しては、「孔子教<sup>レ</sup>育英才<sup>20)</sup>、將<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>供<sup>レ</sup>世用<sup>21)</sup>、」と特徴づけてゐるのである。即ち教育に當つては、如何なる事が今世に役立つものであるか、今日の用に供せねばならぬ事は何であるか、先づ認識されねばならない。かくて吾々は固定した文字を通して今日の用に役立つ道理を把握する事が必要である。

「凡ソ天地間ニアル所ノ書籍皆其ノ用アリ、コ、ヲ以テ天下ニ行ハレテ廢スルコトナシ、何ソ必スシモ一ヲ執ツテ一ヲ廢センヤ、今礼記ノ雜記ナト喪服ノ制ヲ述ヘタル所ヲ執リテ之ヲ研窮スルニ誠ニ煩碎ノ至リナリ、予カ所<sup>レ</sup>見ハ聖人慎<sup>レ</sup>終ノ旨ヲ明ラメタラハ其制度ニ至リテハ、十カ一モ我國ニ用フルコトニアラス、我困苦ヲ忍ンテ之ヲ詳カニセストモ世ニ共事ヲ好ム者多キ故ニ其人ニ託シ置キ、我ハ好ム所ニ随ツテ歴史ヲ讀ミ治乱興亡ノ跡、賢愚得失ノ機ヲ明ラメタラハ、困苦モ覺エス、且得益ノ筋モ亦多カルヘシ<sup>22)</sup>、」

とも言ふ様に、礼記に於ては、「聖人慎終」といふ事、歴史にあつては、「治乱興亡ノ跡、賢愚得失ノ機」を把握する事が何よりも先づ要請され、かゝる事が教育に於ける益を得るの筋である。かゝる立場から淡窓は当時の藩費を観察して次の如く言つてゐる。

「今諸國ノ學校……只訓話ヲサカシ詩文ヲ作ルヲ事トシ、有用ノ学ヲ務メス、之ニ由ツテ學校ノ教モ形ノミノコトニナリテ、人材ノ生育スルナト嘗テナキコトナリ<sup>23)</sup>、」

かゝる藩費の不振は全く、「有用ノ学」を等閑に附した爲であり、「日用ニ供スル」用意を怠つたからである。この「日用ニ供スル」といふ立場からして、学校に於ける学課の如きも、

「經学、歴史学、詩学、文章学、兵学、医学、天文学、和学、職原学、蘭学、書学、数学、詩礼学ナト一切文字言語ヲ以テスルコトノ国用ニ供スヘキコト<sup>23)</sup>、」

等この社会が要求するあらゆる面に亘つて講ぜられねばならないとする。経学の如きは単にこれらの中の一課目の位置が与へられるに過ぎない。何故ならば、医学、天文学、蘭学等は勿論、他の諸学に於ても、現にこの社会が缺くべからざるものとして要請してゐる「日用の学」であるからである。かゝる立場は、当時の学習様式である輪講さへも、

「唯其書籍ノ方面ニ通スト不通トヲ知ルカ為メ而已ニハ非ス、講者言語明白ニシテ譬喩親切ニ、イカニモ聴者ノ肺肝ニ通徹シテ尤ニ覺ユルハ弁才アル故ナリ、如レ此者ハ成長ノ後ハ四方ニ使シテ、君命ヲ不辱ノ徒ナルヘシ<sup>24)</sup>、」

といふ様に、「四方ニ使シテ君命ヲ不辱」といふ事の予想のもとに行はれてこそ其の価値が先づ是認されるのである。又文章を作らせるのも「日用ニナル和文<sup>25)</sup>」で差支へなく、「事ニ処スル所ヲ見シカ<sup>26)</sup>」である。かくて淡窓は

「其(素読ト文章ノ稽古)上ノコトハ學問ヲ職分トスル者ニアラサレハ知ルニ及ハサルナリ、芸術ニ終身ヲ抛ツテ其精微ニ入ルコトヲ求ムルニハ文武共ニ師範役ノ者ハ然ルヘシ、其他ハ無用ノコトナリ<sup>27)</sup>、」と極言するのである。この「日用に供する」といふ立場は淡窓のあらゆる教育の場に於て顯著である。例へば門生を品目する場合に於ても最上位の「楨幹品」と評せられるものは、「御下有法、多而不乱」といふ行政的手腕を有する人であつた<sup>28)</sup>。又これは淡窓の塾にあつては学習様式の一つの変形とも見られ得るものであるが、門生が毎夜淡窓の傍に侍して、ともに談話をして切磋の一助とするに際しても、「談渉ニ文学、揚<sup>29)</sup>権古今<sup>30)</sup>」を上等と品し「唯談ニ世事、使人解<sup>31)</sup>頤者、」<sup>32)</sup>「不言不笑如<sup>33)</sup>木偶人<sup>34)</sup>」は夫々中下と品せられてゐる<sup>35)</sup>。更に甚しきは、文学的思惟の所産である詩に於ても「功能」と「益」とある事を是認して、

「先ツ唐人ノ詩ニ就テ言ハバ、從軍行、塞下曲ヲ讀ム時ハ億万ノ戰士骨ヲ沙場ニ暴スノ辛苦云フバカリナシ、人君若シ此旨ニ通ズレバ辺ヲ

広瀬淡窓の教育意見

開クノ事アルマジ、人臣此旨ニ通ズレバ、辺功ヲ立ツルノ望ハナスマジ、又哀怨ノ詩ヲ讀メバ百千ノ官女、怨曠ノ者多キコト憫ムベシ、人君是ヲ知ラバ縦ヒ色ヲ好ムトモ無用ノ人ヲ取り掠メマジ、人臣モ亦色荒ヲ以テ君ヲ誘クマジ、其他遷謫ノ詩ヲ讀メバ孤臣孽子ノ情ヲ知り、乱離ノ詩ヲ讀メバ、蒼生塗炭ノ苦ヲ知ル、繁華ノ景ヲ述ブルヲ見テハ富貴ノ淫樂ニ耽ルコトヲ知り、閒適ノ詩ヲ見テハ賢者ノ世ヲ避クルコトヲ知ル、何レカ國ヲ治メ家ヲ保ツノ鑒戒ニ非ラン<sup>36)</sup>、」

といふ。即ち詩も亦國を治め家を保つ鑒戒の爲である。又詩の葛屨、汾沮洳、園有桃、蟋蟀、山有樞の諸篇を淡窓自ら日に三復するのにも、「儉嗇鄙吝、務<sup>37)</sup>近忘遠之戒」として其の価値が認められてゐる<sup>38)</sup>。かやうに日用の学を強調することからして、

「人ハ飲食ニ由ラズシテ生キル者ナシ、然レドモ飲食ノ人ハ人皆之ヲ賤シム、書ハ訓話ニ由ラズシテ通ズルコトナシ、然レドモ訓話ノ儒ハ君子之ヲ汗<sup>39)</sup>、」

と言ひ、又

「學者博ク漢籍ヲ讀ミテ之ヲ我邦ニ運用スルコト能ハザレバ則チ一訳師ノミ、何ゾ貴ブニ足ランヤ<sup>40)</sup>、」

と言ふ立場を堅持するに至るのは必然である。訓話は手段としては価値があるが、これのみに終る学者は目的を忘却してゐるものである。又學問は之を實地に應用してこそ始めて尊い価値を生ずるのである。この世用に供する事、日用に供する事、實地に運用する学はこれ即ち実学の立場である。淡窓の教育の目的は我國に應用する為の実学を教へる事であつたのである。福澤諭吉は明治五年二月、「學問のすゝめ」(初篇)を著して、

「學問トハ唯難シキ字ヲ知り、解シ難キ古文ヲ讀ミ和歌ヲ染ミ詩ヲ作ルナド世上ニ実ノナキ文学ヲ云フニアラズ、専ラ勤ム可キハ人間普通日用ニ近キ実学ナリ<sup>41)</sup>、」

と言つてゐるが、この立場は既に淡窓によつて力強く唱導せられた所であつた。然してこの実学の提唱は、其の時代の客観状勢と緊密に結び附いたものであつて、淡窓が、

「人材ヲ教育スルコト、今時諸侯ノ国ニ於テ第一ノ要務ナリ<sup>35)</sup>、  
とか、或又異船屢々我が辺を騒がせた時に、

「天下事アル是文学有用ノ秋ナリ、事アルヲ以テ学ヲ廢スルハ、猶ホ  
醫師病者多キヲ以テ医ヲ廢スルガ如シ、実学ニ志ナキト謂フベシ<sup>36)</sup>、  
と言つたのは即ちそれである。かくて淡窓は其の教育に於ては、つとめてこの実学を強調した。然るに門生の中には、かゝる淡窓の指導にも拘らず、外面を修飾し虚名を欲する者が多かつた。淡窓は之を戒めて次の如く述べてゐる。

「諸生課種務<sup>レ</sup>外而廢<sup>レ</sup>内、取<sup>レ</sup>名而捨<sup>レ</sup>実、今欲<sup>レ</sup>矯<sup>レ</sup>之、而卅年旧習、  
不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>遽<sup>レ</sup>變、須<sup>レ</sup>下善巧方便、誘<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>離<sup>レ</sup>虚名之地、而入<sup>レ</sup>實踐之域上  
也<sup>37)</sup>、」

即ち退けられねばならぬ事は、外と名と虚名であり、いやが上にも勉めねばならぬ事は、内と実と実践である。弘化三年元旦の試筆に淡窓は詩を賦して、其の志を述べたが、其の中に、「願除<sup>レ</sup>記誦詞章夢、一作<sup>レ</sup>眞修實踐人<sup>38)</sup>、」といふ。かゝる実学の強調は、「千日言<sup>レ</sup>之、不<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>一日行<sup>レ</sup>之<sup>39)</sup>、」とする実践の重視に相通するものである。それでは学は実学に志向する事に終るであらうか。

淡窓によれば、学問は実学の強調のみでは未だ完全とは言はれない。ではこの外に何が必要であるか。それは見識である。見識によつて始めて実学が実学としての生命を獲得し得るのである。

「学者ノ務メ見識ヲ以テ要トス、博覽ニテモ見識ナケレハ用ニ立タス  
40)、」

では見識は如何にして養はれるか。これに就いて淡窓は、  
「正シキ人ニテモ、才智アル人ニテモ、書ヲ読マサレハ見識トイフモ

ノナク、其ノ為ス所皆俗見ニ墮ツルナリ、多ク書ヲ読ンテ聖賢ノ心術、豪傑ノ事迹ニ通スルニ非レハ俗ヲ免ル、コト能ハサルナリ<sup>41)</sup>、  
と言ひ、又

「書ヲ読ンテ古今ニ通セハ、因循ノ弊、文育ノ害ハ自ラ免ルヘシ<sup>32)</sup>、  
とも言ふ。即ちこゝで言れてゐる事は、務めて多くの書を読み、聖賢の心術、豪傑の事迹に通ずることである。換言すれば、具体的な材料を研究して、そこから一般的な真理を抽象してくる所に所謂見識は養成されるといふのであらう。然るに次の如くも述べる。

「目之所<sup>レ</sup>睹、耳之所<sup>レ</sup>聞、或得<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>古書、或得<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>世事、混<sup>レ</sup>合胸裏、而識見生焉、諸生必誦<sup>レ</sup>書而後為<sup>レ</sup>学、是所以識見不<sup>レ</sup>立也<sup>42)</sup>、」

この文に於ては、前の引例に反して明かに読書にのみ専心する事の否認である。即ち学問は読書だけに限らず、耳目に訴へてこの社会事象を把握し、思索省察を加へて之を解明して行くところに求めるものが養はれるとするのである。この矛盾を如何に解すべきであらうか。前者は

「迂言」に見えるものであつて、これは眼前に頻発する具体的事実に眩惑されて、学を軽視する嫌があつた当時の為政者を対象として書かれたものである。肥前の大村侯、伊予の大洲侯等に一読されたことが懐旧楼筆記に見えて居るし、其の文章も仮名交り文で書かれてゐる用意を見逃してはならぬ。後者は主として其の塾生を対象として語られたことは、前記の文を見れば自ら明白である。一は読書することあまりに少き人々であり、一はあまりに多く書に親しむ人々である。故に前者にあつては廣く古今の書に通ずる事が頻発する社会事象を解決する所以であり、後者にあつては読書に没頭する事は却つて眼界を極限する事になる。両

者それぞれの缺陷を指摘して見識を養ふ事に志向させたのであると思はれる。かく解すれば所謂楯の両面であつて、見識を養成する事は、この二つの立場を離れ更にこれを止揚したところに養はれると為すものであらう。以上のことからして淡窓は次の様に言ふ。

「読書ニ貴ブ所ハ其ノ之ヲ事ニ発スルヲ以テナリ、身ニ発シテ德行トナリ、国家ニ発シテ事業トナリ、言語ニ発シテ文章トナル、読書ハ猶ホ蚕桑ヲ食ムガ如シ、外ニ発スルハ蚕桑ヲ吐クガ如シ、世ニ博學強記ナレドモ之ヲ発スル能ハザル者ハ猶ホ蚕桑ヲ吐カズシテ徒ニ多食スルガ如シ<sup>44)</sup>、」

「事ニ発スル」とは平たく言へば、読書によつて得たところを實地に應用する事である。つまり之が実學であつて、德行、事業、文章はこれ實學の成果である。然して、事に発するの契機は見識であることを言つたものであらう。

以上我々は淡窓の教育に於ける「求むる所」の具体的な内容として實學と、實學を生かすものとしての見識とに就いて述べた。然し乍ら人間に於ける教育は唯實學に尽きるものであらうか。淡窓の思ひ切つた實學の提唱は時の缺陷を指摘して正鵠を得たものであるとは言へるであらうが、いかにも無味乾燥な學問ではある。かゝる學問のみで人間の生活は充實し、人生を不満なく生きて行けるものであらうか。たゞこれだけで淡窓の人間像は終るであらうか。かゝる疑問をもつて淡窓の教育の實際を眺めて見ると、淡窓は詩を極めて重く取扱つてゐる事實に遭遇する。即ち塾生には「作詩課程」の定めがあり、又塾の正課として詩經、楚辭、唐詩其他多くの詩人の詩を講義し、淡窓自らも「遠思樓詩抄（正統二篇）」の著述があり、又門人の詩を集めた「宜園百家詩（八卷）」もあつて、これらは塾のテキストとして使用されてゐる事は周知の如くである。この詩を重んずる教育は如何なる立場に基づくであらうか。

#### 四

以上の疑問を解決するには淡窓の詩に対する考へ方を究明しなければならぬが、それに先だつて、吾々人間に於ける精神活動についての淡窓の所見を聞く必要がある。淡窓によれば、人間の精神活動には二つの分野がある。意と情が即ちこれである。では所謂意とは如何なるもので

広瀬淡窓の教育意見

あらうか。

「是非利害ヲ判断シテ有益ノ事ハ之ヲ為シ、無益ノ事ハ之ヲ為サズ、是レ意ノ職ナリ<sup>45)</sup>、」

是非利害の判断を為し有益の事は行ひ、無益の事は捨て去るものが意であつてみれば、この意とは主として理智的な方面を指してゐる。心理学の知情意三分法に従へば、知と意とを含めたものが即ち淡窓の意に當るであらう。この意が人間の精神生活に於ては其の一面を担当する。次に情とは如何なるものか。

「サテ無益ト云フコトヲ知りツツ忍ビ難ク棄テ難キ所アルハ是レ情ナリ<sup>46)</sup>、」

是非利害の判断を為し、有益の事を行ひ、無益の事を捨て去るべきであるとする意の活動にも拘らず、忍び難く棄て難き所あるは、情の発動に依てである。この事について淡窓は、

「人ノ死ハ歎キテ歸ラスコト、知レドモ悲哀ノ情ハ止マズ、憂ハ口ニ言ヒタリトテ消ユルニ非レドモ必ズ口ニ言ヒ、棄ハ心ニ棄ンテスムコトナレトモ亦必ズ口ニ言フ、是レ人情ナリ、若シ無益ノ事一切思ハズ言ハザルヲ以テ善トセバ、親ノ喪トテモ長キ月日ノ間勤ムルニハ及ハサルヘシ<sup>47)</sup>、」

といふ。この情を有してゐるが為には人間としての全き性格を具備するに至るのである。更に吾々はこの情意と聯關して、人間に於ける思想表現の類型についての淡窓の意見に耳を傾けなければならぬ。

淡窓によれば、吾々がその思想を發表するに際しては、之を大まかに二つの型に分けて考へる事が出来る。その一は文章であり、其の二は詩歌である。そして文章は主として意的なものであり、詩歌は情的なものである。

「詩文ノ道ニ於テ文ハ意ヲ述ブルコトヲ主リ詩ハ情ヲ述ブルコトヲ主ル、<sup>49)</sup>」



であるからして情の人は詩を好み、意的な性格の人は其の思想を發表するに當つても文章を喜ぶし、詩歌に対する興味が極めて稀薄である。そして逆にこの事は其の人の性格をも規定するに至る。

「吾子試ニ讀書ノ人ノ中ニ於テ詩ヲ作ル人ト詩ヲ好マザル人ト異ル所アルヲ見ルベシ、詩ヲ作ル人ハ温潤ナリ、詩ヲ好マザル人ハ刻薄ナリ、詩ヲ作ル者ハ通達ナリ、詩ヲ作ラザル者ハ偏僻ナリ、詩ヲ作ル者ハ文雅ナリ、詩ヲ作ラザル者ハ野鄙ナリ」<sup>49)</sup>」

詩を好む者は温潤、通達、文雅であり、其の対照である詩を好まない人は、刻薄、偏僻、野鄙であると性格づけられるのであるが、これは前者がより人間的であり、後者がより非人間的な性格をもつてゐる事を言つたものである。では何故に、詩を好まない者が非人間的であらうか。淡窓は之に対して次の様に答へる。

「詩ハ情ヨリ出ツルモノナリ、詩ヲ好マザルハ其人ノ天性情少キガ故ナリ、若シ之ヲシテ詩ヲ学バシメバ自然ト情ヲ生ズベケレトモ、己レカ性ノ偏ナル所ヨリシテ勉強シテ学ブコト能ハズ、愈々無情ノ窟ニ墮ツルモノナリ、故ニ無情ノ人ハ必ズ詩ヲ作ルコト能ハズ、作リテモ詩ニナラズ、此ノ如キ人ハ方正端嚴ノ君子ナリト雖モ其行事必ズ人情ヲ尽サル所アルベシ<sup>50)</sup>、」

即ち淡窓によれば、詩は「情」の流露したものである。故に真の詩には巧拙を超えて人間の真情が溢れてをり、自ら人の心をうつものがあつて、これが詩の本質でもあるが、詩を好まざる、情少き人々は、かゝる詩を味読し理解することは困難である。まして詩を作る事は望むべくもない。作つたにしてもそれはたゞ形式だけであつて、真に詩と言はれるものにはなり得ないのである。孔子は詩三百篇の教へる所として、「溫柔敦厚」と述べてゐるが、この四字は「唯ダ一ノ情ノ字ヲ形容スルノミ」であり、「人ニシテ情ナキハ木石ニ同ジ」と言ふ<sup>51)</sup>。かくて「意」の人は人間として大きな缺陷を蔵してゐると言ふべきである。では情少き意

の人は到底救ひ難きものであらうか。この答は上にも引用したやうに「詩ヲ学バシメバ自然ト情ヲ生ズ」るものである。淡窓は意の人にも陶冶の可能性を認め、情を涵養する方法として詩を学ばせねばならぬとする。日々の学問が何程「日用ニ供スル」事がその眼目であり、「世用ニ供スル」事が緊急の要請であるとしても、非人間的な人格を養成するやうであつては、人間社会に於ては水と油の如く、生活の層を異にせざるを得ないのである。「日用ニ供スル学」とは、詳しく言へば、人間社会の日用になり得る学といふ事である。であるからして吾々は、かゝる非人間的な教育を遂行したならば、日用に供するといふ初めの期待に反して却つて、非人間的な非世間的な人格の形成に終つてしまふ。かゝるが故に情の陶冶と其の涵養とは、実に日用に供する学問の教育と共に強く要求される基本態度である。かやうにして詩の教育は、情の陶冶と其の涵養の最も有効な方法として淡窓の塾に於ては、大きな教育的価値をもつものとして重視されるに至るのである。

更に吾々は、情操陶冶としての詩に就いての淡窓の意見を聞くことにする。

「経ニ君子無レ故琴瑟不レ離レ側ト云フコトアリ、先儒其事ヲ論シテ曰、今時ノ儒生琴瑟ヲ学フニ暇ナシ、之ヲ学ヒタリトモ和漢聲音ノ道不レ同、古人ノ琴瑟ヲ玩ヒシ程ニハ心ニ切ナラス、故ニ古詩ヲ諷詠シテ心ヲ娛サメ琴瑟ニ當ツルニ如クハナシト、予少キヨリ深ク此説ヲ信ス、平生多病ニシテ心思鬱悶スルコト多シ、如此ノ時ハ必ズ古詩ヲ諷詠シテ思ヲ遣ルナリ、心思憂苦スル時ハ古人ノ思ヲ神仙ニ寓シ、想ヲ雲霞ニ寄スルノ作ヲ詠シテ心中ノ鬱滞ヲ盪滌ス、志氣昏沈シテ振フコト能ハサレハ、古人ノ雄壯豪邁乗<sub>二</sub>長風<sub>一</sub>破<sub>二</sub>万里浪<sub>一</sub>ノ氣象アル処ヲ詠シテ以テ之ヲ鼓動ス、忿怒不平ノ事アレハ、安平樂易ノ作ヲ取りテ之ヲ誦シ、散乱煩躁スル時ハ、幽閑沈靜ノ篇ヲ取りテ之ヲ玩味ス、如<sub>レ</sub>是深ケレハ欣然トシテ食ヲ忘ル、妄ニ思ヘラク聖人ノ虞韶ヲ聞イテ肉味ヲ

忘レ玉ヒシモ如シ此ナラント、固ヨリ語記スル所多ケレハ卷ヲ開キ眼ヲ勞スルニ及ハス、如是コト四五十年只是詩ヲ以テ一箇ノ琴瑟ニ當ツルナリ<sup>53)</sup>、

こゝで論じられてゐるやうに、詩は「心ヲ娛サメ」「欣然トシテ食ヲ忘ル」ものである。こゝに詩が人格を陶冶する契機があるのである。さきに淡窓は詩に一応は「益」と「功能」を認めて、「国ヲ治メ家ヲ保ツ鑿戒」となるものとも言つたのであるが、詩の本質はこゝに言はれてゐる如く「心ヲ娛サメ」るもの「欣然トシテ食ヲ忘レル」といふ点にあるのである。淡窓の塾に於ては作詩課程の定めがあつて、一ヶ年を通じて少くとも百八十首の詩を作る規定であつたのは全く如上の見地に立つものである。この課程の詳細に就いてはいづれ触れる機会があらうが、かゝる教育によつて淡窓の理想とする人間像は漸次形成されてゆく。

## 五

以上述べて来たところに依つて、淡窓に於ける教の志向が何れにあるかど略々明白になつた事と思ふ。では教育は總べての人を賢者聖者の域にまで進める力をもつてゐるであらうか。換言すれば、教育の効果は無限なものであるか、或は有限なものであらうか。

これに就いて淡窓は次の如く答へる。曰はく、

「人性有<sup>レ</sup>知愚、猶<sup>レ</sup>刀有利鈍<sup>54)</sup>、」

「人之賢不肖、不<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>學与<sup>ニ</sup>無學<sup>一</sup>也<sup>55)</sup>」

又次のやうにも言つてゐる。

「大匠ハ人ニ授クルニ規矩ヲ以テスルモ人ヲシテ巧ナラシムル能ハズ、故ニ規矩ハ為ルベク、巧ハ為ルベカラズ、為ルベキハ我ニ在リ、為ルベカラザルハ天ニ在リ<sup>56)</sup>、」

これによれば、人の性格と天分は所謂天授のものであり、これは學問によつては左右し得ないとするのである。賢愚は天授のものであり、先天的なものである。人為的に作られた規範は、あらゆる人に授ける事が

広瀬淡窓の教育意見

可能である。即ちこの限りに於て教育は可能である。然し乍ら技神に入る「巧」までは指導し得るものでない。巧は天授のものであり、人為によつて到達し得ない所である。

淡窓はかやうに、其の教育に於てある限界といふものがある事を認めるのである。この事はさきに引用した義府の中に述べた所の「人ノ神識ハ……磨イテ之ヲ明カニスレバ神聖ニ至ル<sup>57)</sup>、」といふ事と矛盾するやうにも思はれるが、これは人間一般に就いての抽象論であり、こゝに述べてゐるのは人間個々についての具体的な問題である。一つは教育の可能性ある人間と、其の可能性が極めて少い鳥獸との比較であり、こゝでは個々の人間に備つてゐる能力に先天的な差異がある事を説くのである。

さて、教育に限界ありとするならば、教育は如何なる事に就いて主力を注ぐべきであらうか。之について淡窓は、

「人性有<sup>レ</sup>知愚、猶<sup>レ</sup>刀有利鈍、其有<sup>ニ</sup>善惡、猶<sup>レ</sup>刀能衛人、又能害人、利鈍在<sup>レ</sup>刀、而衛与<sup>レ</sup>害、存<sup>ニ</sup>於用<sup>レ</sup>之、故孔子論<sup>レ</sup>性、言<sup>レ</sup>知愚<sup>ニ</sup>而不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>善惡、論<sup>レ</sup>人以<sup>ニ</sup>君子小人<sup>一</sup>而亦不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>善惡<sup>58)</sup>、」

と言つて、善惡は性の本質でなくて、後天的のものである事を明かにするのである。既に後天的であるが故に善惡は教育によつて左右する事も亦可能である。かくて教育は主としてこゝに志向されぬばならぬ。

「昔賢江ヲ渡ル、人曰ハク、子能ク風波ノ変ヲ前知スルカ、曰ハク、能ハズト、問フ者曰ハク、子道ヲ學ブト雖モ前知スル能ハズ、何ゾ學ヲ貴ブヤ、答ヘテ曰ハク、我學ビテ能ク知ル者ハ善ノミ、然シテ天道ハ善ニ福ス、我ハ天ノ將ニ我ヲ危キニ扶ケントスルヲ知ルナリ、夫レ我ト子ト織ラズシテ衣シ、耕サズシテ食ス、之ヲ人ニ易フルニ非ズヤ、抑モ子ハ危難ニ於テ之ヲ如何トモスル無ケン、我ハ乃チ知ル所ヲ以テ之ヲ天ニ易フルナリ、此レ學ノ貴キ所以ナリ<sup>59)</sup>、」

比喩を交へて述べてゐるこの一章は、學と教の到達点を明示して餘す

ところが無い。学の目的は、善の把握であり、其の認識である。かくて淡窓に於ける学ぶこと教へる事の究竟の目的は、善を把握する事である。教育とは善を解明し、知らしめる事に外ならない。然るにこの善の解明といふ事は、直ちに其の実践を予想し、この善の実践こそは所謂敬天の道であつたのである。

- 註 (1) 義府、 十二頁、原漢文  
 (2) 同  
 (3) 同  
 (4) 同  
 (5) 同  
 (6) 同  
 (7) 約言補、 十、三頁  
 (8) 同  
 (9) 同  
 (10) 同  
 (11) 約言 二十九条 二五頁  
 (12) 同  
 (13) 夜雨寮筆記、 卷四、五二頁  
 (14) 同、 四十五頁  
 (15) 同、 卷三、四十一頁  
 (16) 同、 卷二、十八頁  
 (17) 同、 卷四、五十三頁  
 (18) 論語云言解、 九頁  
 (19) 燈下記聞、 卷二、十八頁  
 (20) 六橋記聞、 卷十、百十頁  
 (21) 夜雨寮筆記、 卷四、四十五頁  
 (22) 迂言、 三八頁  
 (23) 同、 三九頁  
 (24) 同、 四十三頁  
 (25) 同、 同  
 (26) 同、 同

広瀬淡窓の教育意見

- (27) 同、 四〇―四一頁  
 (28) 文稿拾遺、 三十一頁  
 (29) 六橋記聞、 卷七、七十五頁  
 (30) 淡窓詩話、 上卷、十頁  
 (31) 自新録上、 三十五頁  
 (32) 六橋記聞、 卷七、七十二頁  
 (33) 同、 卷六、六十五頁  
 (34) 福沢諭吉全集、 卷三頁  
 (35) 迂言、 三十七頁  
 (36) 六橋記聞、 卷七、七十五頁  
 (37) 新論 十二―十三頁  
 (38) 進修録 卷十一、九五―五頁  
 (39) 再新録  
 (40) 夜雨寮筆記、 卷四、四四頁  
 (41) 迂言、 四四頁  
 (42) 同上、 四六頁  
 (43) 六橋記聞、 卷七、七五頁  
 (44) 燈下記聞、 卷一、三頁  
 (45) 淡窓詩話、 上卷、一一―一二頁  
 (46) 同、  
 (47) 同、  
 (48) 同、  
 (49) 同、  
 (50) 同、 一二頁  
 (51) 同、 一二頁  
 (52) 夜雨寮記、 卷四、五〇―五二頁  
 (53) 義府、 五頁  
 (54) 自新録上、 二二頁  
 (55) 同、下、 七―八頁  
 (56) 義府、 四頁  
 (57) 同、  
 (58) 約言、 二二―一九頁